

5	生活
---	----

1. 研究テーマ

身近な人々に自ら働きかけ、生物への思いや願いを深めていく児童の育成
 ―オタマジャクシの成長とともに歩んだ第1学年「いきものとなかよし」の実践を通して―

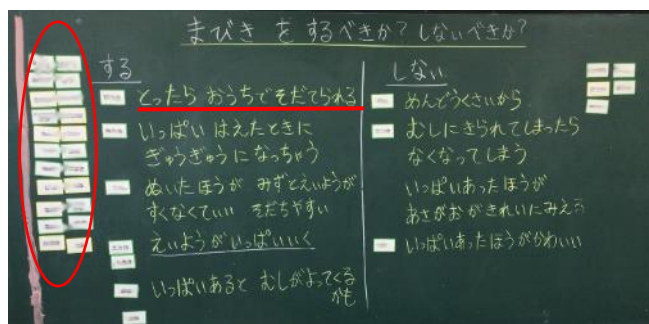
2. 研究概要

(1) 主題設定の理由

4月の入学式。本学級の児童28人と初めて顔を合わせた。学級カラーの胸花を付けて、体育館の真ん中をきょろきょろとしながら歩く。新しい環境で、新しい友達と、これからどんなことをしていくのか。ワクワクとドキドキが入り混じった表情で入場する児童たちの姿に、大きな期待が膨らんだ。

そんな本学級の児童の家庭調査表の文言を読んだ時、わずかな不安を抱いた。それは、「人見知りである」「友達や先生と関わるのが苦手」「打ち解けるのに時間がかかる」というように、人間関係を作ることが苦手で、そこに課題があると考える保護者が多かったのである。4月の国語科の導入時、「友達や先生と話すことが好きですか」という質問したところ、「好き」が28人中18人(64%)であり、低学年の児童としては割合が高い印象であった。実際に、児童の様子を見てみると、自分の自己紹介をうまく伝えられず黙ってしまう児童や、挙手や発言を嫌がる児童が見受けられた。さらに、休み時間になると同じ保育園・幼稚園の友達としか関わろうとしない児童もおり、他者と関わることに消極的、または関わる経験が少ないことに課題が見られることが分かった。

一方、アサガオを育てる活動においては、いきいきとした表情で取り組む児童の様子が見られた。アサガオの本葉が顔を出しはじめた頃、学級で「間引きをするべきか」について話し合いをした。この話し合いは、児童の思いが溢れる時間となった。当初、「間引きをすると、栄養がいっぱいいく」という思いをもつ児童がいる一方、自分の植木鉢からアサガオを抜くことで「なくなってしまう」と抵抗感をもつ児童が大半であった。しかし、「抜いたアサガオを家で育てればいいよ」というような発言が重なっていくと、思いが一変した。どのアサガオも捨てることなく育てられる方法を知った児童の多くは、間引きをしてみたいという願いをもつようになった【資料1】。実際に、自分の植木鉢で育つアサガオの一部を抜く時になると、「ごめんね」「優しく抜いてあげよう」と、アサガオのことを大切に思っている姿が見られた。自分の育てたアサガオのことをかけがえのないひとつの生命だと考え、アサガオについて真剣に話し合う学級の児童の様子から、本学級の児童は、生物への親しみや愛着を確かにもち、生物への思いや願いを深める素地を備えていると感じた。



【資料1】 「間引きをするべきか」の話し合いの板書

また、生活科の学習指導要領では、「身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う」ことや、「動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して…生き物への親しみをもち、大切にしようとする」ことが目標等として明記されている。

これらのことから、身近な人々との関わりをもつ価値を感じてほしい、さらに、生物に対する思いや願いをより一層大きく深めて生物への愛着を高めてほしい、と強く願い、研究の主題を「身近な人々に自ら働きかけ、生物への思いや願いを深めていく児童の育成―オタマジャクシの成長とともに歩んだ第1学年「いきものとなかよし」の実践を通して―」とした。

これらのことから、身近な人々との関わりをもつ価値を感じてほしい、さらに、生物に対する思いや願いをより一層大きく深めて生物への愛着を高めてほしい、と強く願い、研究の主題を「身近な人々に自ら働きかけ、生物への思いや願いを深めていく児童の育成―オタマジャクシの成長とともに歩んだ第1学年「いきものとなかよし」の実践を通して―」とした。

(2) 主題設定の定義

本研究の主題設定の定義を、以下のように設定することとする。

【身近な人々に自ら働きかける】

オタマジャクシを育てる過程において、飼育上の困難、疑問から生まれる思いや願いを抱いた時、友達、教師、上級生、家族など身近な人々に、自分から支援や協力を求め、解決しようとする事。

【生物への思いや願いを深めていく】

オタマジャクシに対する思いや願いの実現にむけて、チームによる飼育活動や身近な人々と関わる活動において、主体的・協働的に取り組んだり、新たな思いや願いを構築したりすること。

(3) 目指す児童像

(1) 主題設定の理由を踏まえて、目指す児童像を以下のように考えた。

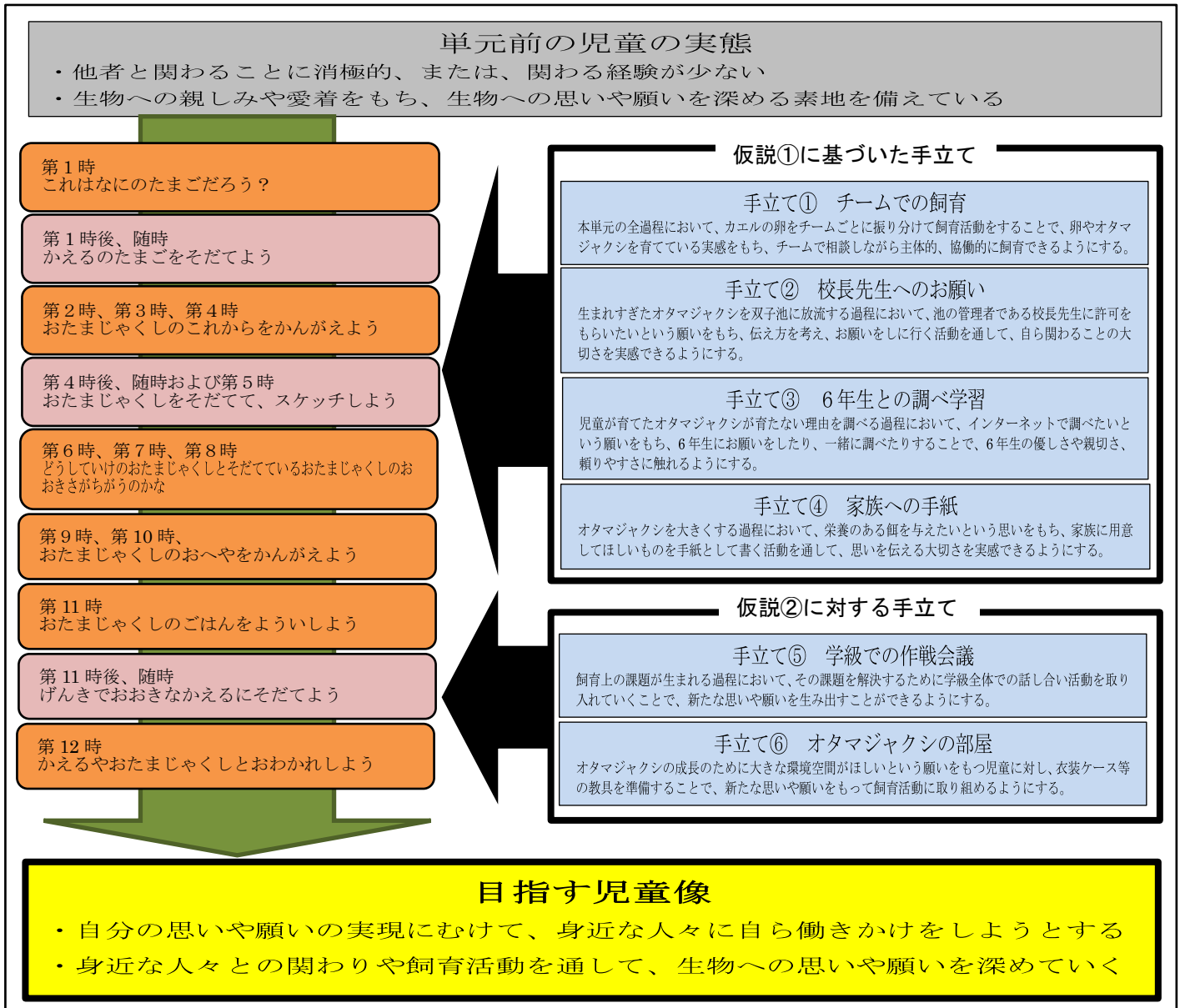
- ・自分の思いや願いの実現にむけて、身近な人々に自ら働きかけをしようとする児童
- ・身近な人々との関わりや飼育活動を通して、生物への思いや願いを深めていく児童

(4) 研究の仮説と手立て

(3) 目指す児童像を踏まえて、次のような仮説を立てた。

- 仮説① オタマジャクシを育てる過程において、児童一人では解決が難しい飼育上の困難や疑問を抱かせる場面に会えば、身近な人々に支援や協力を求めようと自ら働きかけをすることができるだろう。
- 仮説② 身近な人々との関わりや飼育活動を通して生まれた思いや願いを解決するための教具を準備したり、学級での話し合い活動を行ったりすれば、生物への思いや願いを深めていくことができるだろう。

この2つの仮説を立証するために、【資料2】に示したような6つの手立てを用意した。【資料2】には、児童の実態から、2つの仮説をもとにした6つの手立てを施すことで、目指す児童像に変容していくだろう、という本単元の構想を表している。



【資料2】 本実践の単元構想図

(5) 抽出児の児童Aについて

児童Aの家庭調査表には、「人見知りが強くなる場面があり、気にかけてほしい」という保護者の願いが書かれている【資料3】。実際に、4月に初めて担任と顔を合わせて会話をした時、無表情で一言も会話をする事ができなかった。時が経つにつれて、だんだんと表情も豊かになり、担任との会話もできるようになってきたが、授業ではうまく級友と関わる事ができず、挙手や発言は一度もなかった。

ただ、アサガオの飼育では、水やりを毎日熱心に行い、愛情深く育てている様子が見られた。間引きをするかどうかを話し合った時間には、じっくりと級友の考えを聞き、間引きをすべきではないという意見から、間引きをするべきだと意見を変容させ、実際に間引きを行った。丁寧に優しく間引きをして、抜いたアサガオをプラスチックコップに移したあとには、ややぎこちなくではあるが、にっこりとした笑顔をこちらに向けて、家へアサガオを持ち帰った【資料4】。

これらのことから、児童Aに、本単元を通して、他者との関わり大切さを実感し、生物への親しみをより深めてほしいと強く願い、本実践の抽出児童に選び、手立ての有効性を検証することにした。

3 研究の実践

ある日、同僚の先生から「カエルの卵があるけど、ほしい？」と言われた。私は、「ぜひ。子どもに見せてあげたいので」と返し、卵を受け取った。小久井農場の田んぼで生まれた卵であった。「この卵で、児童がワクワクすることができないだろうか」と考え、本実践が始まった。

学知った後、おいてほしいこと

希望：個性を尊重した教育・指導を
お受けしたいです。
人見知りが強く出る場面があり、
先生やクラスメイトに「おや」のことが
たくさんあるため、緊張してしまつてい
る面を解消して下さるよう、お話を
聞かせて頂けると嬉しいです。

【資料3】 児童Aの家庭調査



【資料4】 間引きしたアサガオを見せる児童A

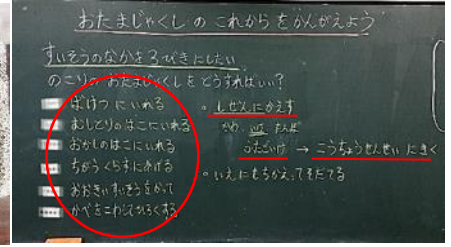
(1) 第1時 これはなにのたまごだろう？ (手立て①)

次の日、教室にカエルの卵をもっていくと、子どもたちが興味深そうに近づいてきた【資料5】。「なに、これ?」「タピオカみたい!」「どろどろしているね!」と、口々に話をしながら、笑顔で観察していた。「カエルの卵だよ」と伝えると、児童Aが「えー!こんな形なの?」と驚く一方、「知ってるよ!」「捕まえたことある」と自慢げに話す子どももいた。そこで、どうしたいか尋ねてみると、児童Aを含め全員の子どもが「育ててみたい!」と、思いが溢れた。ただ、ひとつの水槽に多くの子どもが群がり、うまく観察できておらず、自分事としてとらえにくい子どももいた。そこで、カエルの卵をチームごとに分けることとした(手立て①)。子どもたちに、「卵が無事に孵ることを第一に考えて、チームで話し合ったり育て方を考えたりして、なかよく大切に育てること」を約束事として伝え、飼育活動が始まった。児童Aは、毎日、卵の変化を級友と観察しており、「黒いところの形が変わってる!」と、卵の発生にも気づくことができた【資料6】。「早く生まれてこないかな〜」と目を輝かせる児童Aの姿に、思いや願いが大きくなっていることを感じた。



(2) 第2~4時 おたまじゃくしのこれからをかんがえよう (手立て①、②、⑤)

数日後、オタマジャクシが生まれた。朝、一目散に水槽に目をやった児童Aは「動いてる〜!」と級友と喜び合った。そこで、日ごとにチーム内で餌やりをする担当者を決めるよう伝えた(手立て①)。児童Aは、小さなオタマジャクシのことを思って餌をあげすぎないように考えている姿があった。



しかし、育てていく中で、子どもたちの中に困りごとが生まれた。それは、生まれすぎたことにより、水が汚れやすくなり、弱ってしまうオタマジャクシがでてきたのである【資料7】。そこで、オタマジャクシのこれからをどうするかについて、学級全体で話し合う時間(学級では作戦会議と呼ぶ)を設けた(手立て⑤)。水槽の中を3匹にすることに決め、【資料8】の左側のように「違うクラスにあげる」「水槽の壁を壊して広くする」など、意見は活発に出たが、現実的ではない発言が続いた。そのため、チーム内でもう少し話し合う時間を設けた。すると、児童AのチームではC2の「オタマちゃんが元気だといいね」という発言から、児童Aが「自然に返すとか」とつぶやき、どんな自然に返すとよいかという話し合いとなった【資料9】。その後、作戦会議に戻ると、児童Aは発言できなかったものの、同チーム内のC1が「自然に返す」と発言し、教師が「どこの自然に返すの?」と問うと、各々が「川!」「田んぼに返したら?」などと思いを言う中、児童Aも「双子池とか…」とつぶやいた。教師はそのつぶやきを拾い、もう一度、児童Aに発言を促した。すると、「たしかに」「いいね!」と子どもたちも賛同し、双子池に放流したほうが良いという思いをもち始めて第2時を終えた。

【資料7】 生まれすぎたオタマジャクシ

【資料8】 第2時の作戦会議の板書

- C1 : どうしょ、お菓子の箱は水漏れる
 - 児童A : うん、無理
 - C2 : ちょっとわからん
 - C3 : ○○(他クラスの児童)、おたま欲しい言ってたし、あげれば?
 - C1 : でも、おれたちのだよ
 - C2 : オタマちゃんが元気だといいね
 - 児童A : 自然に返すとか
 - C3 : 森とか?
 - C1 : カエルって川とかじゃないの
 - C2 : 田んぼでしょこの卵
 - 児童A : じゃあ田んぼに返す?
 - C2 : 今から行く?
 - C1 : 無理じゃん先生に怒られちゃうよ
 - 児童A : はは
 - C3 : あそこは、2個の池の
 - 児童A : 双子池?
 - C3 : そう
- (後略)

【資料9】 第2時の児童Aのチームの話し合いの一部

第3時(第2時と連続で行った)では、はじめに双子池の管理者は校長先生であることを伝えた。校長先生は双子池でメダカやフナなどを大切に育てていることを伝えると「勝手に逃がしてはいけない」と発言した。教師が「では、どうする?」と問うと、「校長先生に許可を取る」という思いにまとまった。そこで、作戦会議を開き、教師の支援もありながら校長先生に伝える言葉を考え(手立て⑤)、チームの代表者が校長室に行き、お願いをしに行った(手立て②)【資料10】。児童Aも代表者になろうと立候補することができた。



【資料10】 校長先生に活動内容を伝え、校長先生と一緒に放流の仕方を相談する児童Aたち

やや緊張気味の子どもたち。考えた言葉をなかなか言えず、もじもじしていた。しかし、校長先生から「オタマジャクシを育てているの、頑張っているね」と言われると、笑顔になり、その後は思いを話すことができた。2つある池のうち、放流する池をどちらにするのか、餌やりはだれがやるのか、などについて校長先生とともに計画を立てることができた。「失礼しました!」と元気な声で校長室を退出した児童Aは、「あ〜緊張した!」「でも、校長先生優しかったね」と、校長先生に自分の思いを伝えられたことに満足げな表情であった。教室に戻り、各代表者がチームに戻り、校長室で決めたことを伝えると「いいなー」「ぼくもいきたかった」「おつかれ!」と声をかけ合う子どもたちが印象的であった。こうして、第4時では双子池にオタマジャクシを放流し【資料11】、残ったオタマジャクシを引き続き育てることになった。

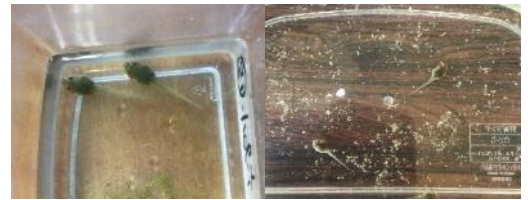


【資料11】 放流したオタマジャクシを見つめる児童Aたち

(3) 第6～8時 どうしていけのおたまじゃくしとそだてているおたまじゃくしのおおきさがちがうのかな (手立て①、③、⑤)

大きくなってほしいという願いを強めた児童Aらは、飼育活動にチームで協力しながら取り組んだ。第5時では、オタマジャクシのスケッチを行い、気づいたことをいくつも書くことができた。

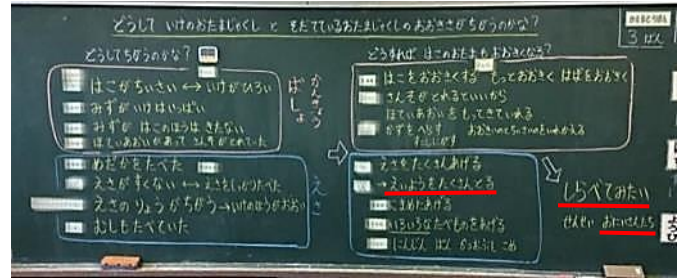
ある日、休み時間に双子池の様子を見に行ったら児童Aら3人から「双子池のオタマジャクシ、めっちゃでかくなってる」という声を聞いた。そこで、その児童Aらと一緒に池のオタマジャクシを捕獲すると、育てているオタマジャクシの数倍大きくなっているオタマジャクシであった【資料12】。



【資料12】 双子池のオタマジャクシ(左)と育てているオタマジャクシ(右)の比較

教室に持ち帰り、学級の子どもたちに見せると、「すごーい!!」と驚き、「なんでこんなに大きいのか?」と疑問が浮かんだ。

そこで2つのオタマジャクシがどうして違うのか作戦会議を行った(手立て⑤)。子どもたちが予想を立て、積極的に発言を繰り返す会議となった【資料13】。



【資料13】 第6時の作戦会議の板書

児童Aは、「餌をたくさんあげる」と発言した級友の付け足しとして、「栄養をたくさん取れるようにする」と発言し、そこから教師が「栄養を取るためにはどうすればいいかな」と問いかえすことで、他の子どもたちが「こまめにあげる」「色々な食べ物をあげる」「にんじんとか、パンとか、かつおぶしとか」という発言につながった。

しかし、それらの多くの発言には、根拠がなく、教師が「それで大きくなるのかな?」と問うと、児童Aらは「んー」と頭を悩ました。「どうする?」と聞くと「調べてみたい!」と、新たな思いをもった。

次に、調べる方法を問うと、インターネットで調べたいという意見があったが、1年生のこの時期では、まだ自分たちでタブレットの操作ができず、検索することが困難であった。

すると、ある子どもが「6年生に手伝ってもらおう」と言った。実は、本学級は普段から6年生との交流をよくしており、子どもたちにとって馴染みのある存在であった。この発言から、学級全体が6年生と一緒にタブレットで調べたいという思いをもち、第3時の時と同様に、お願いの仕方を話し合った。



【資料14】 代表者で集まり伝えることを考え、6年生の教室へ!

今回は、代表者を決めた後、教師の支援なく、代表者が集まって伝える内容を相談し、自分たちだけで6年生の教室へお願いに行くことができた【資料14】。

早く引き受けてくれた6年生。教師は、事前に6年生と打ち合わせをした。「1年生の学びなので、1年生が調べてほしいといったことのみ、検索してあげること(6年生が勝手に調べないこと)」「検索した内容を讀んだり、説明したりすることは〇、ただし、ワークシートへの記入は1年生が行うこと」を約束した。

第7時の当日は、1年生一人につき、6年生が一人以上ついて調べ学習を行った(手立て③)【資料15】。

児童Aは、お兄さんお姉さんが優しく丁寧に接してくれたおかげで、楽しそうに活動した。児童Aは、水槽の大きさをどれくらい大きくすればいいかという疑問をもち、その内容を調べたいとお願いしていた。

調べていくうちに「幅60cm×奥行30cm×高さ36cmの水槽がいい」ということがわかった。しかし、その大きさが良くわからない児童A。そこで6年生は、教師から黒板用ものさしを借り、視覚的に教えてくれた【資料15】。

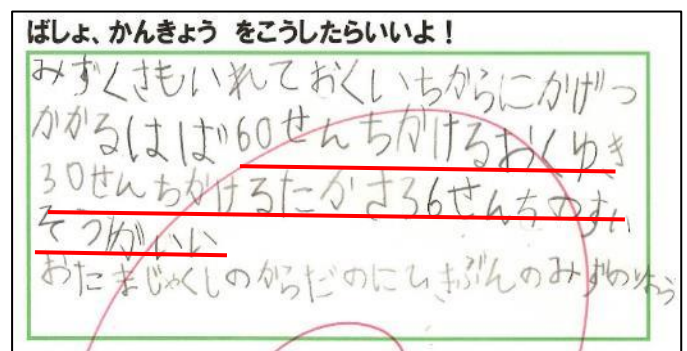
「えーこんなに大きい水槽がいるのー」と、具体的に理解できた児童Aは驚いた表情をし、ワークシートにも詳しく記述することができた【資料16】。

こうして、6年生との調べ学習を終えた本学級の子どもたちは、第8時に調べたことのみとめとして作戦会議を行った(手立て⑤)。

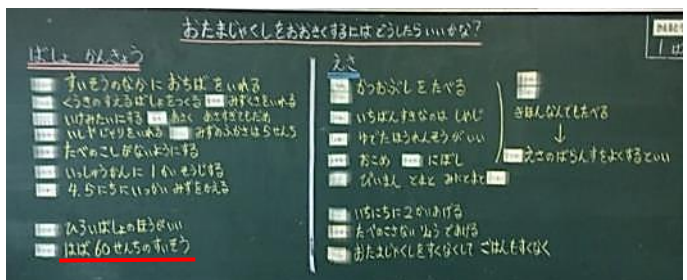
6年生と調べた確かな知識であるため、多くの子どもが前回の予想の時【資料13】よりも、自信をもって発言することができ、発言内容もより具体的であった【資料17】。



【資料15】 6年生と一緒にオタマジャクシについて調べる子ども



【資料16】 第7時の児童Aのワークシート(一部抜粋)



【資料17】 第8時の作戦会議の板書

あった。6年生との関わりを通して、自分の考えに自信をもって、全体で思いを伝えられた瞬間であった。その後、子どもが「でも、そんな大きな水槽、ないよ?」と言った。すると、別の子どもが「あるよ!」とあるものに指をさした。教室の隅に置かれた粘土と粘土板が入った衣装ケースである。たしかに、衣装ケースの大きさは、幅 60 cm 以上であった。それから、子どもたちは衣装ケースでおたまじゃくしを育てて大きくしたいという新たな思いを持ち始めた。

(4) 第9、10時 おたまじゃくしのおへやをかんがえよう

第11時 おたまじゃくしのごはんをよういしよう (手立て①、④、⑥)

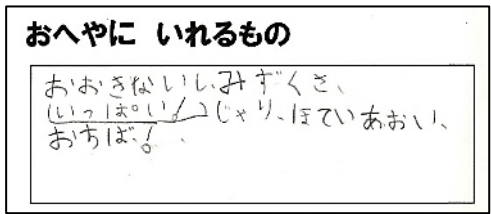
教師は子どもたちに「保護者の方に衣装ケースを貸してくれるか聞いてみよう」と投げかけた。しかし、なかなか集まらなかった。そこで、教師がチーム分の衣装ケースを用意した(手立て⑥)。

衣装ケースを手に入れた児童Aは、とても嬉しそうであった。オタマジャクシの部屋を作ろうと伝えると、「やったー!」と言って喜んだ。そのため、第9時では、チームで調べたことを出し合い、どんな部屋を作るか計画を立てた(手立て①)。第7時の調べ学習で児童Aは部屋に必要なものを調べていなかった【資料16】。児童Aは、調べていない困り感を素直にチームに伝え、「なんかある?」と聞くことができた。チームの級友が調べたことを出し合う中で、教師が「それを使って、どんな部屋にしたい?」とチームに尋ねた。すると、児童Aが「自然っぽくしたい」と発言し、C3の「色々なところを作る感じ」という考えに繋がった【資料18】【資料19】。その後、各々のイメージを出し合い、こんな部屋を作りたいという願いが大きく膨らんだ。

第10時では、第9時で計画したことを実現させるために、外に出て行った。学校内にあるものを自由に取ってきて部屋を作ることを指示してチームごとに活動した【資料20】。児童Aのチームは、計画で立てた大きな石や砂利、落ち葉などを拾おうと学校中を駆け回った。さらには、小枝や四葉のクローバーなど、その場でオタマジャクシが喜ぶと思ったものも入れていた。「ここは、自然っぽくなるといいね」「カエルになったらこの石の上で過ごしてほしい」と、思いを実現していき、『3つのゾーン』を作ることができた【資料21】。後日行った単元のまとめアンケートからも、児童Aが思いをもって部屋を工夫して作ったことがわかる。【資料22】。「早く入れてあげたい!」と目を輝かせる児童Aから、オタマジャクシへの思いが溢れていることを感じた。

児童A: お部屋に入れるもの、わたし、調べてない、わかんないや、なんかある?
 C1: ホテイアオイ入れるといいて、書いた
 C3: ホテイアオイ
 C2: 草?
 C1: 水草。池にあった
 児童A: 双子池の
 C2: あー
 C3: あと、砂利と落ち葉も
 C2: 砂利書いた
 T: たくさん調べていいね。じゃあ、それを使ってどんな部屋にしたい?
 児童A: 自然っぽくしたいね
 C1: オタマちゃんの家だもんね
 C3: 家だから色々なところつくる感じ
 C1: たのしそう
 児童A: いっぱいいれて、葉っぱ
 C3: おー
 児童A: はやくつくってみたーい
 C2: 砂、砂利も、砂利いれる
 児童A: 大きい石と、水草
 (後略)

【資料18】 第9時の児童Aのチームの話し合いの一部



【資料19】 児童Aのチームの話し合いをまとめたワークシート



【資料20】 砂山から砂利を集める子どもたち



【資料21】 衣装ケースに材料を入れる児童Aたち



【資料22】 児童Aが単元のまとめアンケートで書いた工夫点

大きな衣装ケースの部屋でオタマジャクシを育て始めた子どもたち。次に困ったことは餌であった。これまで、教師が用意した熱帯魚用の餌をあげていた。しかし、これまでの学習で、オタマジャクシは様々な食べ物をバランスよくあげることが大切だと気づいていた。そのため、「トマトをあげたい」「鯉節がいい」と、色々な餌を用意したいという思いを強めていた。

そこで、衣装ケースの時と同様、保護者をお願いするように伝えた。しかし、餌の集まりが良くなかった。児童Aに聞いてみると、「ママがダメって言った」と戸惑っていた。ある日、児童Aのお迎えにきた保護者に事情を説明すると「そういうことだったんですね。子どもが何を言っているのかよくわからなくて、流してしまいました」と話した。子どもがうまく思いを伝えられず、保護者の方の理解が得られていない実情が見えてきた。

そのため、第11時では、保護者の方にどう伝えれば良いかを話し合った。「オタマジャクシを育てていることを言わない」「みんなで育てていることも言う」という思いをもとにして、教師が手紙の型を作成した【資料23】(手立て④)。子どもたちは、第7時や第9時で調べたことから用意してほしい食べ物を記述した。また、自分で伝えられるよう、保護者へ伝える練習も行った。

後日、袋に入ったパンやピーマン、トマトにキュウリ。さらには、鯉節や煮干しなど、たくさんの物が集まった【児童24】。児童Aは「ママにちゃんと言えたよ!」と嬉しそうな表情で煮干しを見せてくれた。様々な食べ物を手に入れた児童Aは、より一層飼育活動に熱心に取り組み始めた。

いま、1ねん5くみでは、ちーむでおたまじゃくしをそだてています。ちーむのみんなではなして、

ひつようです。もし、いえにあるものがあれば、きょうりよくしてくれるとうれしいです。

保護者の皆様へ
 オタマジャクシが成長するために、水槽に必要なものや餌を自分たちで調べました。子ども主体で育てています。子どもから依頼がなければ、用意する必要はありません。無理のない範囲で構いません(新たに購入などはする必要はありません)ので、ご協力よろしくお願ひします。

【資料23】 家族へのお手紙の型



【資料24】 児童Aのチームがもってきた餌

